

## 「生い立ちシリーズ」④

### 京都学生寮「土佐塾」の誕生から廃寮まで

公益財団法人土佐育英協会の生い立ちを、歴史が一番長い東京学生寮「土佐寮」の視点から見てきましたが、当協会には京都にもう一つの学生寮「土佐塾寮」がありましたので、そのことについても少し触れておきます。

土佐塾寮は、昭和4年に京大生7名の寮として京都高原町の元風呂屋を借家し、土佐学生京都寄宿寮期成同盟「土佐塾」として誕生しました。昭和7年に、片岡直温元大蔵大臣の出資を得て京都の田中樋ノ口町に土地を確保し、病院建替えにより不要となった木造病棟の寄附を受けて当地に移築し、寮の体裁が整いました。

その後、塾建設運動のメンバーが近畿一円を奔走して資金を集め、昭和9年に土佐塾寮の維持管理を目的として財団法人高知協会を設立しました。昭和28年頃から寮舎の修繕が必要となり、川村高知県知事や氏原高知市長から寄附を得てしのぎましたが、高知協会単独での建て替えには至らず、体力強化のため、昭和33年3月に3つの育英団体が合併して財団法人土佐育英協会を設立しました。(シリーズ①で説明)

昭和45年、老朽化した木造舎を鉄筋コンクリート3階建の北寮と同2階建の南寮に建替え、定員は41名となりました。ところが、築後16年目の昭和60年には早くも老朽化が目立ち始め、平成3年には土佐塾の廃寮に繋がりがかねない危険性を指摘されたため、OB会を発足して寮の再建に取り組みました。

しかし、大学キャンパスが京都周辺に移転するなどドーナツ化現象もあって、寮生の減少傾向は止まらず、入寮生は50%を切るようになりました。このため、平成12年に土佐塾検討委員会を立ち上げ、改修計画の調査を開始することになりました。

平成18年、改修の可能性、土地の利活用、寄附行為等について調査検討した結果、寮の建替存続は困難で廃寮やむなしとの結論に達し、寮生OBや関係者に惜しまれつつ、平成22年10月土佐塾寮の廃寮が決定されました。

近年、社会情勢は少子化、低迷する不況の長期化で、大学生は関東域よりも近畿・関西方面に進学する流れになっており、返す返すも残念な結果となりました。

土佐塾寮建設に奔走された期成同盟の熱き諸先輩方、土佐塾寮の発展・存続に私財を投じて支えてこられた篤志家の方々、土佐塾寮の存続に向けて最後まで支援し続けたOBの方々、そして土佐塾寮の存続にお力添えをいただいた関係各位に対し、深く感謝の意を表するものであります。

次号へつづく